

# 「アフガニスタンの女性に

## 希望を与えたい」

アフガニスタンの首都カブールにある「希望の学校」は、教育の機会に恵まれなかった女性に識字と洋裁技術を教え、自立を支援する無料の学校だ。代表の駿溪<sup>スルタニ</sup>トロペカイさんは、1977年に来日して以来、祖国が戦渦に巻き込まれていた23年間、何もできない自分の非力さに苦悩していた。しかし、紛争が終結し、新たな国づくりが始まるとともに希望の学校を設立し、女性たちに希望を与え、平和な社会に変えていくことと尽力している。



photo by Asada Yuki

### 戦争で閉ざされた 国への扉

2001年12月、アフガニスタンに一筋の希望の光が差した。タリバン政権が崩壊し、23年間に及ぶ紛争が終わりを告げ、新たな国づくりが始まるのだと多くの人が胸を躍らせた。駿溪<sup>スルタニ</sup>トロペカイさんも、その瞬間を待ち望んでいた一人だ。アフガニスタンを離れて以来、故郷を忘れた日はなかった。今こそ祖国のために何かしなくては、その思いに突き動かされ、翌年8月、25年ぶりにアフガニスタンの大地を踏んだ。

1951年、カブールで生まれた駿溪さんは、大学卒業後、短期大学で英語教師を務めていた。「本当は医師になりたいかったんです。父が医師だったので、その仕事を見て育ちました。アフガニスタンでは医師が少なく、特に地方で必要とされていました。しかし、父親は医師ではなく教師になるよう勧めた。

「父はいつも言っていました。『この水は汚いから飲まないで、と人々に注意しても、やはり飲んでしまつて病気になる、医師のもとに来る。もしも人々が教育をきちんと受けていれば、汚い水を飲まないし、病気にもならず、病院に来る必要もなくなる』と。だから、父は私に教師になることを勧めたのだと思うんです」

当時、女性の教育や社会進出は、地方では偏見が強かったものの、都市部では認められつつあった時代だった。働き始めて4年目、カブール大学の教師だった夫が、日本の文部省(当時)の奨学金で筑波大学に留学することになり、7年に駿溪さん子どもを連れて来日した。

2年で帰国するつもりが、79年、ソ連軍がアフガニスタンに

侵入し、戦争状態に陥った。次第に悪化し、帰国の機会は失われた。89年にソ連軍が撤退したが、民族間の勢力争いが激化し、内戦が全土に広がった。

家族の安否を知る手段は手紙だった。81年に父親が病気で亡くなったことも手紙で知らされたが、帰りたいくても帰れなかった。94年ごろから勢力を伸ばし始めたタリバンが、国土の9割を支配するようになって、駿溪さんはさらに絶望し、帰国をあきらめた。

「アフガニスタンの将来を思うと、まるで目の前に黒いカーテンがあるように何も見えなくて、とてもつらかった」

しかし、01年の9・11後、アフガニスタンの情勢は激変する。米・英などによる攻撃と反タリバン勢力の北部同盟の攻勢でタリバン政権が崩壊し、12月に暫定政権が発足した。復興と平和への兆しが見え始めた中で、自分もそのために何かしたいという思いに駆られた彼女は、02年4月、つくば市で「希望の学校」の会を立ち上げた。23年間、戦

火の絶えなかった同国では、多くの戦争未亡人が残されたが、成人女性の識字率はわずか5%

といわれ、仕事に就く能力も限られていた。そこで、国の再建を担う女性たちが識字教育と職業訓練を受けられる学校をつくりたいと考えたのだ。

もう一つ、教育には強い思いがある。

「アフガニスタンの歴史は戦争の繰り返しでした。外国からの侵略、内戦、またゼロからの復興。本当にそればかりなんです。その理由を考えてみると、教育と女性の社会参加が限られているからではないかと。日本に来て驚いたのは、おばあさんも読み書きができること。日本がこれほど発展できたのは、教育の普及と女性の社会参加のおかげではないかと思いました。男性だけでなく女性もきちんと教育を受けられ、国づくりに参加できれば、戦争が起こらず、アフガニスタンの歴史が変わると信じているんです」

駿溪さんは特に、戦争で教育の機会を奪われた、現在10〜20代の「ロストジェネレーション」と呼ばれる世代への教育が重要だと考えている。「その世代の女性が、これから母になり、国の将来を担う子どもたちを育てるから」だ。

開校時は先生が4人、生徒は6人しかいなかった。当時、爆撃を受けていない建物を見つけるのが難しく、1年分の家賃を払って破壊された部屋を改修し、教室を整備した



Sultani Torpekai  
スルタニ 駿溪 トロペカイ  
「希望の学校」代表

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.26



## 25年ぶりのカブールで流した涙

02年8月、駿溪さんは25年ぶりに帰国した。国の状況と、「希望の学校」が本当に必要とされているかどうかを確かめるために、パキスタンから陸路で入国し、カブールに到着したのは夜。電気がなく、何も見えなかった。その日泊まったホテルで、ベッドに入ると、近くで爆発音がし、激しく揺れた。恐怖におののき、死も覚悟した。翌日は兄弟に会いに行くつもりだったが、できなかった。

「自分がとても恥ずかしかった。ここにいる人々は20年以上もミサイルの雨の下で生活していたのかと思うと、合わせる顔がなかった。それで一日中、ホテルで働いていた人たちに戦争の時代の話聞いていたのですが、本当につらかった」

それから目にしたカブールの光景は想像を絶するものだった。どこを見てもがれきの山で、わずかに残る建物の壁は弾痕が八チの巣のようだった。路上には、女性や子どもが物こいがあふれ、母親を助けるために働く子ども

も多かった。「行く先々で涙が止まらなかった。どれほど泣いたか分からない。アフガニスタンは豊かではなかったけれどとても美しい国でした。いろんな民族が隣り合っていて平和に暮らしていた。それが、民族は分断され、いくら探しても平和の兆しは見つけれなかった」

女性の自立を助ける学校の必要性を実感して日本に戻った駿溪さんは、学校設立の準備をして翌年、再び訪問。学校の場所を探しながら、生徒を集めるために家々を回った。そして10月4日、読み書きと算数、洋裁技術を教える「希望の学校」が開校した。生徒数はわずか4人。しかし、翌日6人になり、4日後には20人に増えていた。

「家々を回ると学校に行きたいという女性が少なくとも1人はいました。また洋裁は、女性の誰も習いたいと思っていました。子どもがいても家で仕事ができ、自立にもつながりますから」

洋裁だけ習いたいという女性もいたが、学が喜びを知ってもらいたかった駿溪さんは、読み書きの授業を義務化した。最初は読み書きに関心のなかった女

性も、勉強し始めるとその面白さに目覚め、熱心に学ぶようになったという。

現在の生徒は16〜44歳の70人。家庭の事情で途中でやめる人もいるが、これまでに400人以上が希望の学校で学ぶ機会を得た。レベルアップして、中学校や高校の入学試験に合格した人もいれば、希望の学校やほかのNGOが運営する学校の先生になった人もいる。また、調査したところ、約80人の女性が洋裁で生計を立てていることが分かった。

## 次世代を育てる女性に希望を

苦労は絶えないが、開校以来頭を悩ませているのが校舎の問題だ。学校として借りている部屋は、1年ごとに家賃が値上げされる。そのたびに引越すのを余儀なくされ、4年間で5回も引越した。駿溪さんの願いは、引越さなくても済むように、学校の土地と建物を確保することだ。政府に要請しているが、いまだ聞き入れてもらえないという。

「治安が悪化している背景は、経輪が一つ壊れるとばらばらになつてしまふと思うから」。

彼女はそのための活動を「命をかけて」ではなく、「一生をかけて」続けたいという。「たまに走って、たまにゆっくり、たまに休む。でもながく続ける。ずっと走り続けて、転んでけがして立ち上がれなくなつたら大変ですから」

07年8〜11月、希望の学校から2人の洋裁の先生が指導技術を高めるためにJICAの研修員として来日した。その機に開かれた講演会で、戦時中の過酷な体験を涙ながらに話した2人は、最後にこう語った。「希望の学校で人間としての権

利を学び、女性が男性よりも下というのではないと気付いた」

「これからも各家庭を回り、もっと多くの女性が希望の学校で学べるようにしたい。そして学校の活動をさらに発展させたい」

「アフガニスタンの女性に希望を与えたい」という思いで始めた駿溪さんの活動の種は、荒廃した大地にしっかりと根を張り、萌芽しつつある。今がどれほど悲観的な情勢だとしても、その根が絶やされることはないだろう。希望の学校から、「希望」を受け取った女性たちが巣立ち続ける限り、そして、世界がアフガニスタンに平和をはくむことをあきらめさえないならば。

本日は男性の意識が変わらなければアフガニスタンの社会は変わらない。だが男性の意識を変えることは難しい。ならば、時間はかかるが、女性の意識を

変え、彼女たちが次世代を育てれば、社会は変わっていくのではないかと 駿溪さんはそう考



希望の学校の生徒たちに教育の大切さを伝える駿溪さん。識字の教科書は小学1〜2年、3〜4年、5〜6年の3種類あり、個人の能力によって1年で終える人もいれば、数年かかる人もいる。また、生徒は学校周辺の女性だけでなく、遠方から1時間かけて通う女性もいたという

## 希望の学校の先生を育てるJICAの研修

JICA筑波と茨城県の連携による草の根技術協力事業「アフガニスタン女性の自立支援事業」では、希望の学校の先生を日本で受け入れ、指導レベルの向上を図る研修を行っている。アフガニスタンの女性の自立・社会進出を促進するためには、仕事につながる技術の習得と同時に、子どもを預ける保育施設と保育士が必要だ。希望の学校では、子どもを持つ生徒たちが安心して勉強に集中できるよう、2006年に保育室を設置した。しかし、同国には保育士の制度も学校もないため、保育の先生は適切な教育を受けていない。そこで同年、先生を日本に呼んで幼児教育の研修を実施。また、07年は2人の洋裁の先生が研修を受け、洋裁技術の向上に励んだ。

駿溪さんは「今後は洋裁の教材を作りたいし、保育士を育てるコースも始めたい。保育士になれば仕事にもつながるし、いい保育士が増えれば母親は安心して働けるので一石二鳥。また、カブールではごみ問題がひどく、蚊、ハエなどの大発生による病原菌の拡大が心配されています。学校で母親たちにごみ処理の仕方を教えたい」とやりたことは尽きないようだ。

特定非営利活動法人ユニフェム(国連女性開発基金)日本国内委員会の升本美苗基金助成金による。同基金は、開発途上国の女性のエンパワーメントとジェンダー平等を目的とする活動(個人・団体)に授与される。

## アフガニスタンの平和のために、「一生をかけて」活動を続けたい



2007年8〜11月、JICAの研修員として来日し、森田みどり先生(右から2人目)のもとで洋裁技術を学ぶ、希望の学校の先生、ザキア・グラムジャンさん(中央)とシュグフア・ザルマイさん(左)。2人はもともと希望の学校の生徒。「2人とも日本で研修を受けて自信をつけ、とても明るくなった。学校に戻ってアフガニスタンの女性のために頑張っている」と駿溪さん



子どもを連れて来る生徒が多く、はさみやミシンを使う洋裁の授業は特に危険だった。母親たちが安心して勉強できるよう、学校に保育室を設置した

## Sultani Torpekai

スルタニ・トロペカイ 「希望の学校」代表。1951年カブール生まれ。カブール大学教育学部卒業後、カブール市内の短期大学で英語教師に。77年に来日。83年筑波大学大学院英語教育研究科修了。2000年日本に帰化。筑波大学教育開発国際協力研究センター学外研究員。お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター客員助教授。現在、JICAの研修員受入事業などでダリー語の通訳として活躍。

